

◆八洲忙閑 選

平成二十六年NHK全国俳句大会で、題詠の部（「和」）の特選になった作品のうち、これぞ滑稽句といえるもの（十五人の選者各一句のうち十句）。

| | |
|------------------|-------|
| すらすらと無理言ふ妻や冬日和 | 浜岡健次 |
| 和室ある十八階に帰省せり | 大貫茂治 |
| 鯨日和両隣よく釣れてゐる | 石川 徹 |
| パラグライダー秋の空飛ぶ和尚かな | 前田はや子 |
| 秋日和両手を上げて空を呑む | 永松市夫 |
| ゐるだけで座を和ませて生身魂 | 岸本眞智子 |
| 左手は和音右手は揚羽蝶 | 藤本智恵子 |
| 終戦日父は平和を知らぬまま | 張替和子 |
| 屋根に在る昭和の乳歯秋高し | 田原より子 |
| 遠き声ばかり聞こえて冬日和 | 杉本美佐子 |

このうち「パラグライダー…」の句は、金子兜太選。選評によると、「きっと想像の句だろうと思い、すごい発想力だと感心した」。だが、実際は菩提寺の住職が趣味でパラグライダーに乗って楽しんでいるのだ、という。「和尚」が決め手。

◆日根野聖子 選

小西領南 句集「鐵鎖」「冬帽子」「独楽の芯」

作者の何気ない日常

年越せる金魚に今年金魚足す
それぞれの雛の手正しつつ飾る
無花果食ふ引越荷物に跨りて
選りて買ふ百円均一蠅叩
思ひ掛けぬ部屋で拾ひし西瓜種

鶏頭の頭にのせて軍手干す
境内の朝顔の種失敬す
法話聞く破目春昼の旅の寺
啓蟄や机周辺片付かぬ
住職が空蟬函に貯めゐたり
外人とトイレに花の皇居前
かき氷崩れぬやうに一匙目
寒夜行「ひかり」「のぞみ」に追ひ越され
鶯餅花粉のごとく黄粉こぼす
敬老日市の一律の記念品
駅弁のお手拭き小さし暖房車
時雨きて予定なく寄る野菜市
受診には邪魔になりたる冬帽子

発見した風景

瀧の水岩遠まはりするもあり
同型の社宅桜の一樹つつ
水抜きてプール危険な崖となる
暖房の列車一隅より軒
重箱に伊勢海老の髭納まらず
花菜に立つ指名手配の掲示板
造船所クレーンに結ぶ鯉幟
卓上に思索にふける胡桃の脳
千変万化の形せる生姜かな
早稲田守りぬあるだけの案山子立て
菊花展便乗をせし盆栽展
涅槃図に鼻の短き象侍る

菊花展回る仕掛けの静御前
干し物を片寄せて去る春一番
鰻桶どれがどいつの頭やら
盆僧の座布団過分の厚みなり
鐘楼の横木に大根吊し干す

哀感

花見にゆく人の中吾れ通夜にゆく
鉄帽を被る案山子のありにけり
手術日決まる赤穂義士討入り日
玉虫の舗道に死してかがやけり

著者は、大正十三年、愛媛県新居浜市に生まれる。昭和二十一年、大野我羊主宰の「芝火」に入会。山口誓子、西東三鬼らにも師事し、平成八年「黄鳥」を創刊、主宰となる。俳人協会会員で、俳句歴は七十年となる。

「独楽の芯」のあとがきに「冷厳で重厚で、俳句でなければ表現出来ない感覚の句を目標に、少しでも昨日の俳句になにかをプラスした句をと努力しました」とある。「虎落笛増ゆ工場を閉鎖して」「病棟の病状違ふ秋の灯よ」「流灯の結界闇にひろげゆく」「寒き通夜いまもその人許せざる」「澄む点をさぐり当てたる独楽の芯」「寒さ溜りし病廊の突当り」などが、それに当たる句かと思われる。しかし、その「重み」を踏まえつつも詠まれた何気ない日常や、作者でなければ切り取られることのなかった風景に、滑稽が生き生きと表現されている。

小西領南氏出演の「八木健のCATV俳句」は、滑稽俳句協会のホームページで閲覧可。第十四回、第十九回放送分他にご出演です。